

フィリピンの村落共同体と その生活意識 (その1)

——中部ルソン・タルラック州
の実態調査から——

村上 公 敏

目 次

はじめに

I 調査地の特色

II 調査方法

III バリオの成りたち

IV 農耕生活とその慣習

……………以上は本号……………

V バリオでの信仰

VI キンシップと人間関係

VII 生活目標と生きがい

むすび

……………以上は次号……………

はじめに

私が所属する任意の研究団体であるアジア・エートス会では、ここ10数年来、アジア地域における民族的エートスの実態調査を含む研究を続けてきた。第1回目の実態調査は、スリランカ（当時はセイロン）とマレーシアについて、1965年に行なった。第2回目は、1974年に、インドネシアとフィリピンについて行なった。第1回目は、どちらかといえば、中心テーマであったコミュニナリズムの問題を、宗教・教育・政治・経済といった各部門毎

に、しかも社会の各階層にまんべんなくあたるといった方法で行なったのであるが、第2回目のインドネシアとフィリピンの調査は、はじめから、特定地域の村落共同体を選定し、それをあらゆる角度から徹底的に調査するという方法をとったわけである。

こうして、第2回目の調査では、次のような村落が対象地となった。

まず、インドネシアにおいては、中部ジャワのジョクジャカルタ特別州スレマン郡に属するスレマン村大字トリハルジョのデサ・スチャンと、同じく大字トリタディのデサ・ジャバン、および、プランバナン村大字ボコハルジョのクリン-デサ・ガタ、また、バリ島については、バドゥン郡クシマン村デサ・プナティのバンジャル・アンガーバヤである。

つぎに、フィリピンにおいては、中部ルソンのタルラック州ヴィクトリア町の26のバリオ、ヴィサヤ地方のイロイロ市効外サンタ・バルバラ町のバリオ・タグシン、ミンダナオ島ではサンボアンガ郊外のバリオ・タルクサンガイとダバオ市郊外の7つのバリオである。

これら調査対象地の選定は、けっして無作為に行なわれたのではない。つまり、インドネシア、フィリピン両国とも、国内には、それぞれの地域毎に、人種的・文化的・歴史的事情を異にする集団が生活し、それぞれ特色ある村落構造や意識形態を示しているため、その分布を配慮して、それをなるべくカバーできるように選定したものである。それも、われわれの力量不足のため、全地域をカバーするのはとても不可能であったので、重点を上記の数カ所にしぼらざるをえなかったわけである。

さて、われわれが村落共同体を調査対象に選ぶという場合、ジャワではデサ *desa* またはクリン *kering*、バリではバンジャル *banjar*、フィリピンではバリオ *barrio*、場合によってはシチヨ *sityo* のことを意味している。というのは、それらが外観上、集落としての基礎的で最小のまとまりをもつ単位であるばかりでなく、行政上の最末端の単位でもあり、かつ、自然村としてもつ共同体の慣行なども、やはり、その単位で行われる場合が多いといった理由からである。

では、どうして、民族的エートスの研究をしてきたわれわれが、第1回のとちがって、今回、このような末端の単位の村落共同体を問題にしたかについて、あらかじめ、若干の説明をしておかねばならないであろう。もとより、きっちりと理論的にまとめた問題意識が確立していたわけではないが、研究会の議論としてでてきたいくつかの意図をあげるならば、あらましつぎのようなものであった。

第1に、広い問題としていえば、いわゆるナショナリズムの再評価の問題が関連してい

る。すなわち、とりわけ、発展途上国とか「第三世界」とか呼ばれる地域において、ここ数年来広くみられる現象は、戦後、主権的独立を達成した国々で、独立運動の指導者層によっておしすすめられてきたナショナリズムによる開発や発展のパターン、いわゆる上からのネーション・ビルディングによる近代化路線が、様々な困難と行きなやみを見せる一方、インドシナ戦争に象徴されるような末端レベルからのエネルギーが新たなナショナリズムの担い手として注目をあびていることであろう。このことは、この地域の発展なるものについて、いくつかの新たな視角を必要としてきたことを示唆している。つまり、それは、この地域の社会発展が、西欧型でも、日本型でもない、独自の型と内発性を秘めていることを明らかにしたし、また、これら諸国の政府レベルでのナショナリズムを問題にする際にも、末端レベルでのナショナリズムの趨勢やそれとの関連を問題にせざるをえなくなったことにもつながる。そして、あのベトナムの農村が、全世界にむかって自己の存在と意義とを高らかに主張したごとく、農民として、また、日常的な生活者としてのそのエートスなるものが、実は、変動する民族的エートスなるものの最大の駆動力であることを証明したことでもある。この意味で、われわれの問題意識なるものは、「インドシナ以後」として、政治・経済面でそのインパクトが問題になっている現況と無関係ではない。いわば、その学問面におけるインパクトといえないこともない。

第2に、同じことであるが、末端の村落共同体の生活こそが、その民族の心やエートスの核心をなすという事実である。各民族に固有な文化や伝統、すなわち、宗教や慣習、および物事の考え方などは、住民の大多数をしめる農村の産物であり、かりに、過去においては都市を中心として外来文化の摂取が行なわれてきたにせよ、それを、民族固有のスタイルにアレンジして、その民族独特の風土・歴史のなかに融合させてきた土台なるものは、住民が自然や風土と格闘してきた典型的な場、すなわち農村であった。したがって、これらの民族に固有な発展とネーション・ビルディングを問題とする場合、都市に代表される国家が、強固な伝統と自足性をもつ農村の共同体社会を変形させながら完全に包摂していく過程としてみるよりも、むしろ末端の農村共同体に着目し、それを土台として、土着的で固有な伝統の改編過程として問題にしてみる方がはるかに根源的で本質的な問題に接近できるであろうことである。なお、こうした問題意識は、それぞれの民族内部自体においても、新しいインテリゲンチヤなどによる知的努力の焦点となりつつあることをつけ加えておこう。

したがって、第3に、底辺における村落共同体の生活と彼らの価値意識の流動的・変容過程を把握するのは焦眉の的となるわけであるが、その際、そこに残存する共同体原理なるものを丸ごと肯定するのではなく、ポジティブな面とネガティブな面をふりわけつつ、エネルギーを秘めた社会の再生と人類の未来像との関係で再評価していくことが必要になるであろう。そうなってくると、やや大げさな言い方をすれば、東南アジア研究は、たんにアジア的特質の解明に終ることなく、欧米において基礎づけと発展をしめし、その普遍性を自負してきた既存の人文・社会諸科学の枠組に重大な問題を提起することにつながるであろう。

ところで、以上のようなわれわれの調査目的は、それだけではまだほんのアウトラインにすぎない。すでに上記の問題意識と同様の方向で検討がすすめられていて、そうした成果もぼつぼつ明らかになりつつあるが、そうした成果や、古典的な諸理論や諸範疇とからみ合わせながら具体的に検討する作業も多く残っている。こうした作業は、われわれの第2回東南アジアの実態調査の全報告書とともに、次年度に予定されている仕事である。

なお、第2回調査は、文部省の昭和49年度の海外学術調査にかんする科学研究費をうけて実施され、インドネシア3人、フィリピン3人の2チームによって行なわれたものである。

私自身は、フィリピン・チームに属し、倫理学者の池田長三郎教授がエートスの歴史・風土との関係、同じく山田英世教授が生活慣習、私が社会意識をそれぞれ担当した。しかし、調査にあたっては、つねに3人1組で行動し、資料の蒐集にあたった。その時集められたデータは、未検討かつ未整理のままであり、近いうちに、フィリピンで協力いただいたフィリピン人の学者の訪日をまって作業に入ることになっている。

したがって、ここでは、とりあえず、フィリピン・チームとして蒐集したデータを、未整理のまま、意味づけ、比較、一般化等の作業がまったくないまま、生のかたちで書きとめておくだけに限定したいと思う。もっとも、疑問や、なお調べる必要のある問題などはその都度のべていきたい。

また、フィリピン・チームが足を運んだ調査地は、前記のように、大きくは4つの地域である。そのうち、もっとも精力的にとりくんだ中部ルソンのタルラック州だけでもその資料はぼう大なものに達する。したがって、他の3カ所にかんする調査データの発表は、別の機会にゆずらざるをえない。

I 調査地の特色

タルラック州ヴィクトリア町について具体的なデータにはいる前に、まずはじめに、データをより良く理解する上に必要な、調査地にかんする特徴のいくつかをのべておきたい。

マニラから北へ、高原都市バギオへ通ずる国道を123kmほどいくと、タルラック州の中心都市タルラックへ着く。そこから今度は、幹線道路をはなれて北東へ19kmほどいったところに、ヴィクトリア町がある。

このあたりは、中部ルソン平原のほぼ中央にあたり、みわたす限り森や林や田や畑が続くはるかかなたに、平原をとりまく山地がつらなっているのがみえる。

中部ルソンのこの平原は、マニラに近い順にいうと、ブラカン、パンパンガ、ヌエバ・エシハとタルラック、それにパンガシナンの5つの州にまたがっていて、フィリピンのなかでは、最大の、そして第1の穀倉地帯をなしている。

大都市近郊の穀倉地帯であることは、この地方に他の地方に比べて大きな特色をもたらす最大の原因となっている。たとえば、ヴィサヤ Visaya とよばれる中部フィリピンには、スペイン統治期以来の大土地所有制がいまだ多く残存しているが、この地では、地主層の非農業部門への進出、貨幣経済の進展にともなう現金収入の必要等から階層分化も比較的進んでいることがあげられ、大地主よりも中小地主の方が顕著な存在を示している。しかしながら、水田耕作にともなう人口稠密地帯でありながら生産性が低いことは、絶えず農業不安の原因ともなり、スペイン支配以来、いく多の農民騒擾も発生した。独立後のフクバラバップの反乱や、最近の新人民軍の活動も、この中部ルソンが中心的な舞台であった。

こうした社会・経済上の特色に加えて、とくに、われわれが選定したヴィクトリア町は言語族 ethno-linguistic group の分布上も特色ある地域となっている。

フィリピンには、約87におよぶ異った言語や方言があることはよく知られている。ルソン島でみると、このうち5つの大きな言語族の分布が目立っている。第1は、ルソン島の東南端に住むビコール語 Bicol を話すビコラーノ人 Bicolanos, 第2は、マニラを中心としてルソン島中部に住むタガログ語 Tagalog を話すタガログ人 Tagaloggs, 第3は、中部ルソンのパンパンガ州、タルラック州、パンガシナン州の一部にかけて住むパンパンガ語 Pampangan を話すパンパンガ人 Pampangos, 第4は、パンガシナン州一帯に住むパン

ガシナン語 Pangasinan を話すパンガシナン人 Pangasinans, 第5は, 前二者が比較的狭い地域に住む言語族であるのに対して, 北部ルソンの海岸沿いから山地にかけて広い地域に住むイロコ語 Iloco を話すイロカノ人 Ilocanos である。このほか, ルソン島には宗教も慣習もちがうイゴロト人 Igorots やイフガオ人 Ifugaos をはじめ, 少数の山地族などがいくつか住んでいるが, この調査でさしあたり問題にしたのは, 上記五つの主要言語族であって, 彼らがひとしくキリスト教徒でありながら, そのうち, 国語となっているタガログ語を話すタガログ人とそれ以外の言語族との関係がどうなっているかをみることで, われわれの重要な関心事の一つでもあった。

ところで, ヴィクトリア町についていえば, タルラック州の東部州境に位置していて, この町が, いわば, 上記5つのうち, 3つの方言の接点にあたっているということである。つまり, 東のヌエバ=エシハ州は, 南部がタガログ語地帯で北部がイロカノ語地帯である。ヴィクトリア町の西のタルラック州は, 前述のとおり, パンパンガ語地帯であり, 同州の北部, つまり, ヴィクトリア町の北部はイロカノ語地帯となっている。わかりやすくいうならば, ヴィクトリア町付近が, ちょうど, イロカノ, タガログ, パンパンガのそれぞれの方言を話す人達の混合地点になっているということである。

別掲のヴィクトリア町の地図でみると, 中心部から南西はパンパンガ人が比較的多く, 中心部はタガログ人, 北東部と東部はイロカノ人がそれぞれ比較的に多い。それも, あとでのべるように, 載然と別れて住むというよりも, バリオによって多少のちがいがあるが, 同一バリオに2つないし3つの言語族が同居するところが多かったのである。

フィリピンにおける言語の多様性の問題といっても一概に論ずることができないことはいうまでもない。すなわち, キリスト教徒であるか, 回教徒であるか, あるいは山地人のように原始的精霊信仰であるかといった宗教事情や慣習によって, その融合の度合も変わってくる。また, 人種的にみて, プロト=マレー系か, デウテロ=マレー系か, あるいは, ネグリートかといったことや, その他社会的事情もそれに関連して問題となる。ミンダナオにおけるキリスト教徒と回教徒の対立1つをとってみても, この問題が複雑で, かつ解決困難であることは容易に理解できることである。

しかし, 回教徒および高地に住む種族のような, いわゆる文化的少数民族 cultural minority と, 国民の90%以上をしめるキリスト教徒との関係がはらんでいる問題は, キリスト教徒内部における方言のちがいからくるエスノ=リンギスティック・グループ間の問題

とはかなり質のちがったものであろう。

われわれの調査についていうと、文化的少数民族の問題については、ミンダナオ調査で若干とりあげたのであるが、しかし、それは、今回の調査では、補足的、ないしは、クロス・チェックとして試みたにすぎなかった。したがって、われわれのさしあたっての重点は、エスノ＝リンギスティック・グループ相互間の問題におかれたわけである。

さて、ヴィクトリア町は、その名のとおり町制 municipality が施かれている。全国には66の州 province とい53の憲章をもつ市 chartered city、それに千数百の町があり、町のなかにはほぼ10から20ばかりのバリオがある。

ヴィクトリア町には、全国の平均からみると多いと思われる26のバリオが存在する。別図をみたらわかるように、中心部にある広場 plaza や教会 church を基点に、ほぼ四方に大きな道路（舗装）が広がり、その幹線道路に沿うような形で26のバリオが散在している。中心部には大きな市場があるほか、十字路を中心に商店街が200米ばかり続く。商店街といっても、ほんの質素な店が数軒しかなく、扱っている品物も農民の日常生活の最低必需品や飲食物のたぐいである。だから、広場や教会、それに町役場だけがいやに目立ち、立派であるのに対して、あとは日本の町、あるいは村の中心部よりも、もっとひなびているといった方が正確であろう。だから、町制が施されているとはいえ、全体としていえば、昔ながらの日本の農村の規模を大きくしたたたずまいといえないこともない。ただ広場のかたわらに、かつてスペインがもちこんだ荘園、エンコミエンダ encomienda の名残りともいうべき、大邸宅の古びた廃屋があったのと、中心部にたむろする多くの客運びのバイク・タクシーがわずかに時代の変遷を物語っていたとみることができよう。

ヴィクトリア町は人口約3万5千人である。26に分れたバリオは、多少の変化はあるがほぼ1つのバリオの人口が1000人から2000人である。戸数も200戸前後が普通であった。この点でも、全国的にみて、ほぼ100戸前後がバリオの標準であるとすれば、規模が大きい方に属する。

ヴィクトリアの建設は、教会に彫刻してある年代からみて、スペイン統治の初期、すなわち、17世紀頃である。しかしながら、それは、この町のごく中心部だけの建設であった。地図にあるところの、中心の十字路近くのいくつかのバリオがそれで、それ以外の周辺のバリオは、前記のようにそれぞれの方言を話す人々が、それぞれの地方から移住してきて、新しく定住してでき上ったものであろう。つまり、周辺バリオは、19世紀後半、すなわち、

約百年程前から、この地に移住してきた人々でしめられている。比較的に新しい農村であることと、移住民ででき上っているということは、あとでのべる調査の各項目に対する答え方のなかにも、色濃く、その表われがみられる。

そもそも、フィリピン全体としてみても、住民の移動や人口の流動性は、東南アジアの他の国々にくらべてみて、高いものを示している。もともと、中国南西部に起源をもつといわれる現在の東南アジア人達は、はるか紀元前の時代から南下して現在のそれぞれの国々や島々に移住し、定着するようになったが、やっと、14・5世紀になって、現在の平地に住むフィリピン人達は、それら東南アジアの島々から大量に海を渡って移住してきたのであった。しかし、フィリピンにたどりついた彼等は、最初の寄留地から、さらに土地を求めて、フィリピン諸島の中での移動をくりかえしたのである。

ヴィクトリアに移住してきたイロカノ人を例にとるなら、彼等は、最初の寄留地である海岸近くまでせまった北部ルソンの少い平野部での生活に困窮し、奥地へ、あるいは南部へと移動せざるをえなかった。もちろん、スペインによる土地制度、その他の植民地政策等によって促進された面もあるだろう。とりわけ、中部ルソンは、海岸から少し奥まったフィリピン最大の平野部であり、定住者が、南の海岸沿いからも北の海岸沿いからも続々と集結してきたことは容易に想像できる。住民の移動にかんしては、現在のミンダナオにおける回教徒の反乱の原因になっているキリスト教徒達（多くは大土地所有が顕著なヴィサイヤ地方からである）のミンダナオ移住が良く知られている。彼等も土地を求め、回教徒や文化的少数民族の住む土地を奪って移住した。これにはマニラ政府の開発と移民の政策も大いに関係がある。

ともかく、以上のような背景から、ヴィクトリア町には、前にのべたように、いくつかの言語族が混在して定住し、かつ、村落共同体としてのその歴史の新しさという特色が与えられたわけである。もちろん、移住してくる以前に住んでいた地方の慣習や特徴は、そのまま引きついできているのであるが、そうした点での継続性と、新しく他の方言を話す人々と共同生活を始めたという点での断続性が混在していて、われわれにとっては、変化し、流動しつつあるフィリピン人の村落共同体の意識を調べるには、絶好の場所となりえた。

Ⅱ 調 査 方 法

従来、こういうたぐいの調査方法としては、たとえば、1年とか2年もの長期間、住民と生活を共にして、ほとんど住民と同様の生活のリズムにとけこみ、心のうちとけ合いをえることによって、微妙なニュアンスや奥深い住民の深層意識にまでふれることがなければ真実の姿はつかめないものとされている。それはたしかにそのとおりであって、実際にそうした方法をとった調査には、すぐれたものが多いことも事実である。

このフィリピンにかんしても、そうした長期間の滞在による調査は、従来、あまり多いとはいえないが、外国人、日本人をあわせていくつかのすぐれた業績が出ていることもたしかである。

しかしながら、そうした調査が可能なのは、財政的、身分的、時間的に恵まれた、いわば調査のための特権的条件を有する場合に限られていて、調査を思いついた人間すべてが可能になるとはいえないし、むしろ、関心と意欲をもつ人間の何百、何千分の一のケースでしかない。

われわれの調査の期間は、予備的・個人的なものをのぞくと2カ月ぐらいでしかなかった。短期間であるということが、われわれの調査方法にいくつかの制約を課し、そのために、十分に解明できていない問題も多い。しかしながら、調査対象地が前に述べたようにほとんど調査されていない、しかも、特殊な条件を備えた町であったということ、そして、短期間ながらも、三人の眼と耳、および集中的な聴きとり方法を生かしたものであったと思えるため、従来、明らかにされていなかったことの、極くわずかな部分にではあれ、接近できたのではないと思われる。そして、解明できなかった点については、今後も機会さえあれば、何回でも足を運ぶ予定である。そういう意味からすれば、この調査および本稿は、今後、長期間続くわれわれおよび私の、出発点を確認するという性格をもっていよう。

もう一つの制約は、言語の問題であった。われわれはまだ、タガログ語に習熟していなかったため、フィリピン大学大学院に留学中の大野拓司氏の助けを借りたのであるが、それでもなお、方言であるイロカノ語、パンパンガ語が障害となった。しかし、この点についても、連日にわたって案内役をつとめてくれた町のパトロールのお巡りさんが助けてくれたため、ある程度はカバーできた。こうして、時として、次のような珍妙な場面になったこともしばしばであった。つまり、われわれが日本語なり、英語なりでインフォーマン

トに対して行なった質問事項を、そのお巡りさんともう一人、フィリピン人の運転手が必死になってタガログ語、イロカノ語、パンパンガ語に翻訳し、インフォーマントに理解させる。つぎに、インフォーマントが方言で話す言葉を、再び、お巡りさんと運転手がタガログ語なり、英語なりに翻訳してくれて、どうにかわれわれが理解することができるものとなる。しかしながら、こうした場面は、特別な用語とか、特別なインフォーマントの場合にかぎられていて、比較的にわずかししか出合わなくて済ますことができた。その上フィリピンは、英語の浸透度が東南アジアで最高の国であるためか、大部分のインフォーマントが、たとえば、スペイン語なまりの英語であれ、多少とも英語を話すことができたため、われわれの理解度もそれだけすすむことができたのであった。

お巡りさんが案内役をつとめてくれたことは、このように、実に便利であり、恩恵を受けた反面、不都合になった点も多かったと考えられる。1972年9月に戒厳令が施かれて以来、フィリピンでは、マルコス大統領のいわゆる「新しい社会」計画を強力にすすめるため、それと引きかえに、末端の村落にいたるまで表現の自由の制限が当然のことながらある程度ともなうようになった。自由に、思うがままに答えてくれることを期待する質問者にとっては、この善意のお巡りさんの存在によって、真実の話が聴取できなくなること懸念しなければならなかった。どの程度、自由な答えにプレッシャーがかかったかを推定することは、困難であるが、質問の方法を考慮することによって、この問題はある程度解決できたと思っている。政府がバリオを重視している割には、物質的には何もしてくれないといって非憤慷慨していたバリオの長、すなわちバリオ・カピタン *barrio kapitan* もいたくらいであった。もっとも、われわれの調査は政治的意識や意見にかんする事柄には重点がなかったので、質問の方法如何によっては、かなりの成果がえられる可能性はあったと考えられる。

常時、われわれが宿泊していたのは、町の中心部にある大きな民家であった。おそらくは、この町で一番喧噪と思われる商店街の只中にあった。ここから、東西、南北ともほぼ10kmはあると思われるほど広いこの町の全バリオを訪問してまわるには、毎日、車でいかねばならなかった。

こうした調査に普通には共通に採用されている方法をわれわれも採用した。すなわち、調査のデータは、観察、聴きとり、統計資料、録音、カメラ、一部ではアンケートなどの方法で集められた。

聴きとりは、基礎サンプルと自由な質疑応答との二つの部分からなりたっている。基礎サンプルとは、インフォーマントの世帯毎に、家族全員の名前、性、年令、主な職業、身分、副業、学歴等を記入し、さらに、その家の土地所有・非所有を、米作地、砂糖きび畑、その他に分けて面積をヘクタールで表わし、さらにまた、直接に自分で耕作している土地があれば、それが自己の所有か小作地か借地であるかの区別とその面積を記入した。この基礎サンプルはヴィクトリア町全体がカバーできるように、すべてのバリオから採録したが、その際、主たるインフォーマントには、当該バリオの模様を全体的に把握しているバリオ・カピタン、もしくはバリオの委員であるバリオ・カウンシルマン、あるいはそれにかわる人をえらんだ。インフォーマントの話の傍証もかねて、普通の一般農民とも、しばしば気楽に話しこんだりした。

自由な質疑応答では、やはり、上記の人々をえらんでインフォーマントになってもらった。質問事項は、実に細かいことをわれわれ三人がこもごもに聞いたのであるが、質問の仕方は、民俗学等でよく使われている方法を用いた。例えば、「結婚の相手を選択するときの基準は何か」とか、「豊作のお祝いをするか」とか、出産、成人式、結婚式、葬式といった通過儀礼の慣習をはじめ、農耕儀礼等々について、無数の質問の仕方を用意し、相手の答えに応じて、順々に関連して引出すという方法をとった。

質問した内容は多岐にわたっているが、それを項目的に分類すると、およそ、次のとおりになる。

- 1 バリオの成りたち（歴史、環境、方言、創造説話など）
- 2 農耕様式（生産力、生産物、技術等）
- 3 土地所有形態（自・小作、共有地）
- 4 水利、共同労働
- 5 バリオの運営原理
- 6 生活慣習ならびに儀礼
- 7 個人と共同体（対家族、対親族、対バリオ、対エスノーリングスティック・グループ、対国家）
- 8 個人、共同体と信仰の関係（祭礼、儀式、カソリシズムの受容のされ方と土着信仰、民話、説話、タブー、迷信、方位観）
- 9 歴史感覚、位置感覚、宇宙観

10 教育, 世代のずれ

11 生きがい, 生活目標

以上の項目の1つ1つについて、順番にのべていくことはあまりにも広がりすぎることになるし、また、1つ1つのバリオについてすべてをのべることも、重複になるため、ここでは割愛することにしよう。したがって、上記の項目を適宜に整理して、次の第三節以下五つの節に圧縮してのべざるをえなかったことと、重複をなるべく避けて、典型的なバリオでの例しか引きあいに出すことができなかったことをお断りしたい。

III バリオの成りたち

ヴィクトリア町にある26のバリオは、大まかにみて2つのバリオ群に分けて考えることができそうである。1つは、中心部にあるサン・ガビーノ、サン・ヴィセンテ、サン・ニコラス、サンタ・ルシア、サン・フェルナンドのバリオであり、他の1つは、それ以外の周辺部にある諸バリオである。

中心部のそれは、ポブラシオン *poblacion* といって、地方の町に特有な広場や教会を中心とした街区をなしている。ヴィクトリアでは、ほぼ、碁盤の目のように街づくりがなされていて、商店、その他、非農業部門に従事する人達が、周辺部にくらべると、相対的に多く住んでいる。街路は整然としていて、フィリピンの国花である白い花のサンパギータをはじめ、ハイビスカス、ブーゲンビリア、火焰樹などの花が咲きみだれていた。町長のキャンディード・L・ギアム氏の話では、この町では華僑がほとんど同化しているとのことであったが、それでも、この街区にある4軒ばかりの目立つ商店・工場が華人系の経営であった。

周辺部のバリオには、これとは反対に、農民が圧倒的に住んでいる。遠くから見ると、広々と田畑が続くなかの一画に、ヤシやバナナの木をはじめ、竹やその他、熱帯の樹木が繁っている部分があるが、その林にかくれるようにして、家が散在しているというのが、こうした周辺部バリオの外観である。多くのバリオは、その近くにクリークか、沼地をもっているのが普通である。というのは、そこが灌漑および魚という蛋白質の重要な源泉だからである。

以上のことからわかるとおり、中心部バリオには、違った方言を話す人の混在度が相

対的に多く感じられたのに比較して、周辺部では、1つのバリオの大多数が同一方言の出身者で占められているというケースが目立った。たとえば、中心部のバリオの1つ、サン・フェルナンドをとってみよう。このバリオ・カピタンのドミンゴ・ギアムさんは、大工さんである。彼が語るところによると、このバリオの特徴の1つは、様々の職業の人から成り立っていることであった。400強の家族数で約3000人の人口をかかえているが、主な人口増は、戦後になってから行なわれたものであった。それも、他地域からの流入によるもので、輸送の便宜がますにつれ、パンパンガ、タガログ、パンガシナンの各方言を話す人々が職や土地を求めて移動してきたものだという。

一方、周辺部のバリオの1つ、北端にあるマンゴラゴを例にとってみよう。ここは、ほぼ、300家族前後からなるバリオであるが、先祖がイロコスからきたため、ほとんどがイロカノ語を話し、また、同じく、ほとんどが農民であった。南にあるバリオ・マルイドでは、住民約1000人のうち、4分の1がパンパンガ人で、残りの大多数はイロカノ人であった。

問題になるのは、こうした違う方言を話す人々から成りたっているバリオにあって、その相互関係がどう意識されているか、あるいは、標準語であるタガログ語との関係はどうであるかということであった。この点については、次のいくつかの話が参考になるだろう。

いまとりあげたバリオについてみてみよう。まず、マルイドでは、インフォーマントの農民ヴィセンテ・ガルシアさんはパンパンガ出身である。彼は、パンパンゴのほかにはタガログ語が使える。彼がいうには、このバリオの住民はみんな、タガログがわかるので不便は感じないという。住民のほとんどがイロカノであったマンゴラゴでは、インフォーマントのバリオ・カウンスルマン、ハシント・ガガリンさんは、タガログ語が話せなかった。聞いていて、わずかだけしか理解できないという。しかし、パンパンゴは理解できるし、多少は話すことができる。彼の意見では、方言がわからないのは不便であるが、たとえばマンゴラゴの男（イロカノ）とパンガシナンの女が結婚する場合には、方言をミックスしたり、その他のあらゆる手段を使って理解し合うことは可能だという。そして、フィリピンが現在、タガログ語の普及に力を入れ、統一しようと努力していることは、歓迎できることであり、学校でタガログ語を使った授業が行われているため、これからは便利になるだろうということであった。中心部のサン・フェルナンドでは、さきほどのギアムさんの説明によると、雑多な方言からなるこのバリオでの共通語は英語とタガログ語であって、

バランガイ・ミーティング *balangay meeting* をはじめ、バリオでのいろいろな会合では、この2つの媒介語が良く使われているということであった。このほか、カブルアンのグスマンというバリオ・カピタンは、自分はイロカノであるが、子供の名前はすべてタガログ名でつけた、なぜなら、フィリピン人としてのあかしにしたいからだとのべていた。

バランガイ・ミーティングとは、マルコス政権が大衆を動員して、彼の理想とする「新しい社会」づくりに参加させるための手段として、とり入れられたものであり、バランガイとは、14・5世紀頃にマレー系人種が海を渡ってフィリピンにやってきた時に乗っていた舟の名前である。当時は一艘の舟に40～50人単位で乗ってきたが、それがそのまま、フィリピンに定着した際に社会生活の基本単位となってきたものである。今はすでに存在していないが、かつて存在していたフィリピン社会の最末端における共同生活の単位であるバランガイの名をかりて、バリオ住民の政治参加を盛りたてようとしているマルコス政権の意図は、そのかぎりでは、伝統にもとづく政治を草の根から進めようとしている点で意欲的である。

そこでついでに、今度はバリオの運営上の問題に若干、ふれてみよう。各バリオには、4年ごとに選挙でえられるバリオ・カピタンのもとに、通常は6人のバリオ・カウンシルマンがいて、それぞれ役割分担がなされている。戒厳令後、公選制が残っている唯一の場が農村バリオであるということは、ここがいかに根強い自治の伝統をもっていたかをしめすものであろう。

サン・フェルナンドのバリオ・カピタンに、バランガイ・ミーティングでどういう事を議論するのかと質問したところ、次の事項だと答えた。土地改革、バランガイの組織化、医療、グリーン・レボリューション、清掃、少年犯罪、家族計画等にかんする問題である。

もちろん、こうした事項は、政府による上からの掛け声によるものばかりであって、バリオの切実な関心と結びつかない。周辺バリオのほとんどのバリオ・カピタンは、バリオの一番切実な問題として、食料不足、就職の機会が少いこと、灌漑の三つを共通に挙げていた。これらは、政府の力によってしか解決できないものばかりである。しかるに、政府は何もしてくれないと、半分、怒って訴えていたバリオ・カピタンもあったほどである。こういった点では、バランガイ・ミーティングの運動も、一皮むけば案外実のないものといえる。

バリオ・カピタンは無報酬である。その仕事はほとんど奉仕的といえるもので、夫婦げ

んかといった家庭内のもめごとにといたるまで、一切のトラブルが彼のところにもちこまれる。彼のところで解決できない問題であれば、町レベルの役人のところへもっていく。もちろん、切実な問題である上記の三つの事項は、町役場でも解決不可能である。したがって、家族、隣近所を中心にして、バリオ・カピタンをまじえた相談で、自力で何とか相互扶助をはかる以外にはない。

バリオによっては、シチョ *sityo* をもっているところがある。シチョというのは、スペイン語の *sitio* からきた言葉で、位置、場所を意味するが、バリオにあっては、その中の一部の住民が大きなまとまりをもって居住する区を意味する。このシチョが大きくなると分離独立して、1つのバリオになるケースが多い。北端のマサラサはカリブンガンの、東部のバタンバタンはバラヤンの、それぞれシチョであったが、シチョが大きくなったため独立してバリオとなったものである。

シチョよりも小さく、約20軒ぐらいのまとまりをもった、いわゆるカピット・バハイ *kapit-bahay* (隣近所) からなる区域をプロク *purok* という。これは、バリオ内にあるいくつかの小道沿いに、まとまっている場合が多い。6人のバリオ・カウンシルマンは、多くは、このプロク毎に、互選でえらばれてくるケースが多いということを聞いた。

すべてのバリオの中心部には、必ずといってよいほど、教会と広場がある。教会といっても、その多くは、数メートル四方の小さな木造の建物で、屋根は、ゴシック風などのあの教会に特有な形にはなっていない場合が多い。普通の造りである。小学校もバリオ毎にあって、バリオ・スクールといっている。普通は4年生までの、分教場という感じの小学校 *primany school* である。大きなバリオでは5・6年用の小学校 *intermediate school* をもっているが、小さなバリオでは、隣のバリオと共通で、5・6年用小学校をもっている。ついでにのべておくと、ヴィクトリア町には、小学校を卒業してから進む高等学校 *high school* が、公立1つ、私立1つあって、公立高校が1365名、私立高校が約500名の生徒をかかえていた。

地形からみると、ヴィクトリア町は南部および中心部の方がやや土地が高くなっていて、少し雨が降ると、東・西・北部は洪水になる。灌漑設備がないため、水は沼やクリークからあふれて田や畑を覆い、家々の床下まで浸水する。とくに、北のマサラサ、カリブンガン、西のバントーク、バルバロトなどは浸水がひどく、1週間も2週間も雨がひくまで待つという状態であった。

洪水になると、普通でも悪路である道路は通れなくなり、交通は途絶え、バリオによっては孤立する所もでてくる。

大たいこの中部ルソンは、治山治水があまりなされていなかった上、ここ20年間、周囲の山から木材を乱伐したため、毎年のように雨期になると洪水がでる。マニラ市内はもちろんだが、とくにひどいのはパンパンガ州で、人間の背ぐらいまでくる洪水はざらにある。その点、タルラックはまだ少い方だといえるだろう。

前にものべたとおり、中心部のポブラシオン地区をのぞけば、ほとんどが100年このかたの新村である。数世代前の祖先が、他の州からこの地区へやってきて、住むのに適した環境をみつけ、あるいは開拓して、バリオを創設した。

バリオの人々は、その創設にまつわる物語を信じ、語りつたえている。バリオの名前の多くは、その語り伝えられてきた話に密接につながったものが多い。いくつかの例をあげてみよう。

東南部にあるサン・ハシントは、約300世帯、3000人のバリオであるが、この創設者の名前がドン・ハシント Don Jacinto であり、それが守護聖人としてあがめられている。彼とともに創設に貢献したレボ、ヴァリンスエラ、ガリエボ、リガスコといった人達の子孫は、今日でもバリオ内にあって支配的な地位をしめている。創設者達は、イロコスから約100年程前にこの地へやってきて、木や草を切りはらい、小さな沼がある傍にバリオを創設した。サン・ハシントの少し北にあるバリオ・バラヤンは、先祖がこの地を開拓したとき、あたり一面、バラヤン balayang というバナナの木の種類が生えていたことから、それがバリオ名になったし、隣のバリオ・クルスは、同じく、ココナツの木が十字架 cruz みたいになっていたのがあったからだという。同じく、東のバリオ・パラクパラクは、広場にスペイン時代から生えているパラク（アカシヤ）の巨木が二本あることから名付けられた。この木はまた、精霊信仰の対象でもあり、美女の悪霊 maligno が宿っていて、枝を切ると祟りがあるという。精霊信仰については、別の節でまた一括してふれることにしよう。

このほか、西北のバリオ・バントーク Bantog では、やはり、先祖がイロコスからきたとき、バントークというイロカノ語で小高い土地を意味する場所を中心にバリオが創設された。その丘には森があった。その後、南部から洪水がくるようになって、その小高い丘も押し流され、今では、洪水のたびに全部が床下浸水になってしまう。

北部にあるマンガラゴは、その昔、マンゴーの木が多く、創設者がアゴという人であったことから、その名がつけられた。

このように、バリオ名はそのほとんどがバリオ創設にまつわる話をもとにして名付けられていて、土地の特徴、木、創設者のいずれかの名を取っている。そして、創設者は、しばしば、守護聖人として祀られ、教会の中に、イエスやマリア像とならんで、像が安置されている。信仰にかんしては、一括してまた別の節でふれることにする。

IV 農耕生活とその慣習

西部にあるサン・オーガスチンというバリオは、この町最大の野菜の産地である。野菜は、裏作として9月、10月、11月、12月、1月に多く作られる。芋、トウモロコシ、豆、ナス、トマトのたぐいがよくつくられるが、このバリオで作られた野菜は市場に出される。他のバリオからも、もちろん、多かれ少かれ、市場に出される。

しかしながら、多くの農家は、自給用の野菜もたくさん作っている。とくに家の敷地内の栽培で目立ったのは、野菜というより、主食の1つであるカモテン=カホイという芋である。カモテ *kamote* というのは甘藷であるが、カモテン=カホイ *kamoteng-kahoy* は、カサバ *kasaba*、あるいはタピオカ *tapyoka* ともいわれ、甘味のない芋である。多くは粉にして、団子や菓子にして食べる。

多くのバリオの農民が耕作して生計をたてている作物といえば、砂糖きびと米である。砂糖きび畑と米を作る田は、区別されているが、転換はできる。

砂糖きびは、11月から4月までの間に播種、10月頃に収穫する。

米の場合は、灌漑がないので、ほとんどが一期作であるが、播種はほぼ6月末で、2週間後から田植えが可能となる。田植え期は雨季の7、8、9月である。というのは、雨が降らなければ、待たなければならないためである。カラバウ *kalabaw* とよばれる水牛で田を鋤き、草を取りのぞいてきれいにする。田植え後、一週間位たって肥料をやる。除草は、1枚の田につき2回位はやる。120日後、つまり、早くで、ほぼ11月中旬前後になると、収穫をする。もみを乾燥させ、一カ月後位に脱穀する。

グリーン・レボリューションの掛け声によって、収穫の多い新品種、マサガナ99が奨励されていて、融資によって種を取得できるが、肥料や手数料がかかることと、水が余分に必

要なため、その条件をみたすことができない普通の農民は、あまり、新品種に熱心ではないという。

バリオ・マサラサでの話によると、現在、1ヘクタール当りの収穫は、80カバン(1カバンは46kg)ぐらいである。町長によると、ヴィクトリアの平均では約65カバン(3,000kg)、良種で約96カバン(約4,500kg)である。戦前は45カバンぐらいであったのが、化学肥料を少し使うことによって、増産できるようになったという。灌漑が完備されればさらに増産が見こまれるのは確実だといって、バリオ・カピタンのアポリナリオ・ブエラノさんは嘆いていた。彼は、2.5ヘクタールの土地を耕やす自作農である。米と砂糖きびを作っているのだが、仮にすべて米を作るとして、1カバンは市場値で92ペソだというから、計算してみると、彼の米作による年間収入は約73万2千円、月収にして6万円強である。しかし、人によっては、このなかから、手伝いの農業労働者に賃金を払わねばならない。賃金の相場は1日1人当たり、3.5ペソから4ペソである。ブエラノさんの場合は、長男と次男が手伝うから必要ないかも知れないが、そのかわり、10人の家族をその収入で養わなければならない。肥料、農具費も差引かれるとなると手取りは6割ぐらいにしかならない。それはフィリピンでは小学校の先生並みであるが、それでも、生計は苦しい。子供の教育費は出ない。

米の増産を阻んでいる最大の問題の一つは、灌漑設備がないことである。天然のクリークや沼を、灌漑に利用しているバリオもあるが、ほとんどは、灌漑の用をなしていない。なぜならば、雨が降ったら溢れ出るままであるし、降らなければ降らないで、水が少なくなる。したがって、人々は、田植え時になると、雨が降るまで、ただひたすら、待つだけとなる。降ったら降ったで洪水になり、せっかく植えた稲も押し流される。ポンプ1台すらないというのが現状であった。

マニラに帰って、フィリピン大学にあるアドヴァンスト・スタティーズのセンターのスタッフ教授達と、この問題について討議したとき、そのスタッフの一人は、農民が政府の援助を待つのではなく、自分達で灌漑問題の解決のリーダーシップをとるべきである、という意見をのべていた。しかし、貧困のなかで、どういうリーダーシップをとれるのかは大変に難しい問題である。農民の灌漑設備にたいする希望は切実である。しばしば、政府の機関である National Irrigation Administration に押しかけて嘆願することもあるようだが、優先順位によって政府の灌漑事業が行なわれるため、この地区へはなかなかまわっ

てこないということである。

農民たちには、結局、雨が降らない時は雨乞いをする方法しかない。文字どおり、運を天にまかせるわけである。雨乞いは、バリオごとに、バリオの守護聖人の像をかつぎ、ローソクまたはタイマツをともして、夕方、道路で行列をつくって行進するという方法で行なわれる。行進のときには、聖母マリアの名をとえたり、雨乞いの呪文をとえたり、歌をうたったりする。雨が運よく降ったら、教会に集まってミサを行なう。

土地所有関係については、統計資料をまだ十分に蒐集していないため、正確な数字ははっきりしない。今後、さらに明らかにすべき課題の1つである。

1つの例で示してみよう。サン・アンドレというバリオでは、500家族のうち、半数が自作農であり、小作料50%を払う小作人が約100家族、さらに土地をもたない農業労働者が100家族、農業以外が50家族となっている。

農地改革（1974年7月現在）で、24ヘクタール以上の土地は農民に貸し与えられるか、売られることになっている。この中部ルソンは、前にものべたように、比較的に土地が細分化されているため、このヴィクトリアでは、何十ヘクタールを所有する中地主や数ヘクタールを所有する小地主が極く少数いるだけで、あとは、1ヘクタールから5ヘクタールぐらいまでの自作 owner, 自小作 owner-tenant, 小作 tenant, 借地人 lease-holder が大部分をしめている。先程のブエラノさんの場合は、2.5ヘクタールを耕作していたが、彼の場合は平均的な耕作規模だといえる。現在、土地改革の進展度は約70%ということであるが、それにしても、サン・アンドレの例のように、土地をもたない農業労働者の比率が高いことは注目される。

借地人というのは、土地改革によって、1度を買うことができない小作人が、1定期限（15年から20年）の間、借地料25%位で借りているケースである。25%とは、3年間の収益から、肥料その他の必要経費を差引きして、1年の平均額をだし、その25%ということで、ほぼ1ヘクタール当り12カバンぐらいになる。なお、土地改革は米作地についての制度であって、砂糖は適用外である。

バリオ内の土地は、ほとんど私有地であり、日本でいう入会地のようなものは見当らなかった。そのかわり、クリークや湖沼は入会権のようなものがあって、その使用はバリオの人間ならば自由となっている。それらは水利に使用されるのは極くまれで、魚を獲ったり、水浴したりするのに使用されている。

田植や収穫時における共同労働の慣習はかなり見受けられた。バンガルというバリオでは、賃労働者を雇うよりも、プロクの人達、いわゆるカピット・マハイで助け合いをやるということであった。このバリオは5つのプロクからなり、全部で175家族が住んでいる。プロクの住民は、必ずしも親籍同志ではないが、その人達が田植えと収穫の手伝いをするわけである。田植えのときに御馳走を食べるという習慣はないが、収穫後にはそれがあるという。マルイドのバリオ・カピタンの語るところによると、かつては、収穫の祭りとして、新嘗祭ともいべきラサ lasap の行事があった。通常は、管理人（不在地主のために在村管理をする人）が村人を集め、赤飯などをたいてご馳走をふるまい、個々の家でももち米でつくったケーキをお供えしていたという。今はこの習慣はなくなっていて、むしろ、毎年一回の守護聖人の祭りといえるバリオ・フィエスタ barrio fiesta で盛大にやるという。これは、収穫時とはかぎらず、むしろ、守護聖人の誕生日などに行われるので、必ずしも農事だけに関係しているとはいえないであろう。

今、現に存在するものとして、共同労働が多くみられたのは、農事よりも、バリオの教会、バリオ・スクール、広場、道路等の整備作業という形であった。これには、カピット・マハイよりも、もっと広範になって、バリオ全体が当る。行政上の最末端組織としてのバリオの寄合い、つまり、バランガイ・ミーティングなどには、大方は戸主が出る。しかし、このほか、ボランティアな寄合いもいくつか存在する。たとえば、青年男女だけの寄り合いがあって、これが環境美化運動を積極的にすすめる中心になったりする。共同の仕事とか相互扶助を意味する言葉として、インドネシア語ではよく知られるようにゴトン・ロヨン gotong rojong があり、マレー語ではシャリカット sharikat があるように、タガログ語でもバヤニハン bayanihan がある。

農事における慣習にふたたびもどりたい。フィリピンの山地人に今なお色濃くみられる精霊信仰としてのアニトウ Anito 信仰と比べると、中部ルソンの平地人の間では、キリスト教の浸透度が強く、それだけに農耕儀礼もほとんどみられなくなっている。たとえば、播種から収穫、そして倉庫に収めてからまでも含めて、それぞれの段階で、東南アジアの各民族には、共通に多くの農耕儀礼が残っている。しかし、このヴィクトリア町でわれわれが確認できたことといえば、調査の方法が悪いためか、もともと消えてしまったのか、その両方だろうと思うが、極くわずかしかなかった。あるとき、田のふちに立ててあった竹の先に白い紙をつけたものがあったので、「あれは何のためか」と質問したところ、「信

仰とは関係ない。雀を追ひ払うためだ」という返事がかえってきたりしたこともあった。

前にのべたフィリピン大学での総括討議の際、フィリピンの教授達がのべたことによると、それでも、平地人たちの間では精霊信仰はある、ただ山地人とは祈りや崇拝の仕方がちがうだけである、というのである。たとえば、田植えの時には旗を立てて行なったり、あるいは、繁れる草を植えるとか、櫛を土の下に埋めたりして、米がよく繁ったり、作物に根がたくさん出るようにお呪い^{まじな}をするという。また、作物が実を結ぶことを、人間界で使うタームとしての妊娠などで表現するという。

こうした呪い^{まじな}のほかに、われわれが確認したことは、いわゆる縁起かつぎであった。たとえば、バンガルというバリオでは、7月29日に田植えをやると収穫が悪くなると信じられていて、原因ははっきりとは覚えていなかったが、長く云い伝えられてきたものだという。また、8月1日に仕事に出ると、ケガをするという。理由は、その日に悪魔の子が死んだからだという。こうした縁起は子供まで知っていて、バリオ中はその日、働かないことになっている。他のバリオでも、バリオ毎にこのような縁起の悪い日がきまっている。

農事以外のことでは、まだ外にも多くの迷信や精霊信仰がある。これについては、次節で、キリスト教信仰との共存の仕方を含めて、別個にまとめて論ずることにする。というのは、たとえば、インドネシアのジャワにみられるスラマタン *selamatan* の儀式のように、精霊信仰と共同体の結合を深めるという意味を同時に含むような、典型的な儀礼はここでみることができない。むしろ、農民の意識の奥深くに沈んでしまったかにみえる精霊への信仰は、キリスト教の導入によってかなりデフォルメされていて、すでにふれたバリオ・フィエスタという、一年で最大のお祭りのなかに精霊信仰とキリスト教信仰、そしてバリオの共同体としての観念、およびその結束と繁栄を高める祈りが同時に結合しているという象徴的な意味をみることができるからである。